

<ガラパゴス諸島ツアー>

10月16日（月）から21日（土）まで、総勢13名でニューヨークから飛行機でガラパゴス諸島に行き、ハバナで本船と合流した。



イグアナ横断注意の標識

この島での体験の面白さを一言でいうと、「危うくイグアナを踏みそうになり、アシカのひれ（右足？）を踏んでしまい、ペリカンにくちばしで背中を小突かれ、ゾウガメになられた」ということになろうか。それほど、身近にさまざまな動物が次々に現れ、驚きの連続だった。島自体も、溶岩が広がる荒涼とした大地から、霧に覆われた高地の森林までめまぐるしいほどに景色が変わる。加えて、はるか昔、ここに若干26歳のダーウィンが訪れ、この動植物相の変化から、「進化論」に至るインスピレーションを得たと思えば興味は

尽きない。

ガラパゴス諸島は南米エクアドルの領土である。南米大陸から西へ約1000キロの太平洋にある。10 km²以上の広さを持つ13もの大きな島と6つの小島、さらに100以上ものたくさんの岩礁からなる。空港はサンタクルス島のすぐ隣の島、バルトラ島にある。溶岩台地に広がる飛行場からバスで15分ほどで船着き場に着き、幅200mほどの海峡を船で渡り、そこからサンタクルス島を縦断する道路をバスで1時間ほど走ってホテルに着いた。

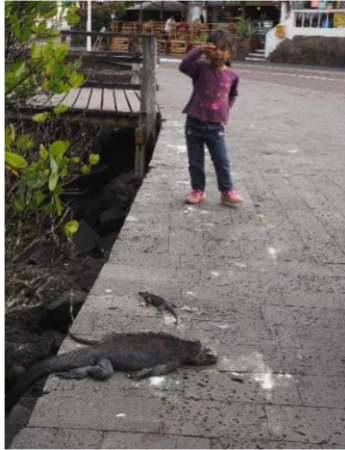
船着き場からホテルまでの直線道路は面白い。遠くから見ると、島の中央に500mほどの山があり、霧で隠れている。道路はその霧のなかに突っ込むようにまっすぐ伸びている。バスはぐいぐいと標高を上げる、窓から入る空気がひんやりする。ガイドの話によると、海岸線と高地とでは植物相が全く違う。この違いが、動物の生態にも影響している。

島を円に例えれば、この道路は円の中心を通る直線で、それ以外に、円の周辺を通る道はない。下手に歩けば、溶岩台地の隠れた穴に落ちたりする危険があり、何より、水場がないので、道に迷えば生き残るのが難しい。山はあるが標高は低く、川がない。10年ほど前に海岸沿いを1人で歩いていった画家が行方不明になり、手帳は見つかったが、結局遺体は見つからなかったそうだ。

今でこそ、全諸島で25000人、サンタクルス島で16000人が住んでいるが、かつては政治犯の流刑地にもされ、その自然環境は「過酷」の一言だったという。

ただ、大陸から隔絶した距離と、その「過酷」さが、そこに住む動物たちにとっては、天敵のない世界を生み、島ごとにさまざまな亜種が生まれるほど、ゆったりとした時間が、(地学的な意味で)つい最近まで流れていた。

さて、初日の夕方、ホテルから1キロほど離れたダーウィン研究所まで、海岸沿いの道を歩いた。ホテルから20mほどで目抜き通りの「ダーウィン通り」がある。その角の白い建物が市役所だと言われつつ、通りをほんの1分ほど歩いたところで、「危ない」という声に



驚いて足元を見ると、ウミイグアナの親子がコンクリート舗装の端っこにじっとたたずんで、ピクリとも動かない。まさか、街のど真ん中の道路に、世界にもここにしかないというウミイグアナがいるとは思わず、あやうく踏むところだった。

そこからガイドに案内されて、マングローブが茂る中、木製の小さな栈橋のような道を海に向かって辿っていくと、その先端に黒い塊がいっぱいに見えてきた。そのすべてがウミイグアナだった。



じっとして動かないのは、体を温めているからだ。変温動物なので、海に入ると体が冷える。そうすると陸に上がり、あたたかい石やコンクリートのうえで体温を回復する。見ていると1頭が栈橋からコンクリートの柱に沿ってまっすぐに下に降り、岩場を通過して、海に入ってしまった。少し沖合の海底で主食の海藻を取るのである。いかつい外貌に似合わず、おとなしいのだ。

その先に、小さな魚市場があった。地元漁船から魚を受け取り、すぐに捌いて、売り出す。その時に、捨てられる魚の内臓を目当てに、これまたいろいろな動物が集まってくる。翌日、そんな風景に出くわした。ペリカンが3羽いたので、足を踏み入ると、中にアシカが一頭いて、さかんに頭を上げている。そのあたりの



の写真を撮っていると、いつの間にかアシカが足元に近づいていて、左足でアシカのひれを軽く踏んでしまった。思わずのけぞると、体がペリカン団のなかに入ってしまったようで、ギャーギャーと声上がり、背中に軽い圧力を感じた。痛くはない。ペリカンが「うるさい男だ」とくちばしで私の背中を小突いたのだろう。

さて、話を戻して、ようやく「ダーウィン研究所」に着いた。ここは英米を中心とする諸国から寄付を受けて、ガラパゴスゾウガメの保護をもっぱら行っている非営利団体だ。

ゾウガメは普段島の内陸にいるが、産卵期になると海岸沿いに降りてきて、砂の間に産卵をする。それを研究者たちが大事に研究所に持ち帰り、温度調節をしながら、孵化させる。その温度が微妙で、28.5度を保つと雌が生まれ、29度だと雄が生まれる。現在は、8割が雌だそうだ。温度調節はいろいろ試した結果、ドライヤーの熱でうまく温めている。孵化か

ら4年経過したところに子亀を自然の中に返す。そのころになると、ようやく甲羅が固くなって、ネズミや猫、タカなどの天敵から身を守ることができる。

2日目は、船着き場から小型クルーズ船に乗り、「ノースセイモア島」という無人島に着いた。溶岩がはるか昔海岸に静かに流れ込みそのまま固まったような平らな地形だ。そこにわずかばかりの土が重なり、灌木が生えている。その合間に長さ500mほどの環状のトレイル（自然観察路）が整備され、そこをゆっくりと歩いた。ガラパゴスの大自然のなかのほんの一角にすぎないのだが、それでも一足ごとに驚きの連続だった。

小さなボートから飛び降りて岩場にしがみついた我々を迎えてくれたのは、ガラパゴスアカメカモメ。形はカモメそのものだが、目の周りは赤く、目が黒いのは夜行性の特徴だという。「他の鳥との生存競争が激しいので、夜行性に移行したのだろう」とガイドはいう。



トレイルに足を踏み出すと、すぐにガラパゴスオオグンカンドリの営巣地が目に入る。この鳥は、全長85センチから1mほどあり、翼を広げると大きさは2mを超える。ガラパゴス諸島固有の種類である。

雄は色鮮やかな求愛行動をすることで有名だ。のどにある赤色の皮膚に空気を送って、メロンかスイカのように、はち切れんばかりに膨らんだ真っ赤な袋を自慢げに見せびらかす。頭上にメスが飛んでくるのを確認すると、

オスは一斉に体をのけぞらし、両方に広げた翼を打ち振り、甲高い声でメスを呼ぶ。荒涼とした島の風景のなかで、あちこちの木の上で、真っ赤な袋が打ち震え、不思議な華やかさを醸し出していた。オスは一度膨らませると7～8時間はそのままにするそうだ。



もう少し進むと、今度はリクイグアナの登場だ。長さは50センチほどだろうか。推定年齢は40～50歳。別の陸イグアナが低いサボテンの上に乗っている。サボテンが彼らの好物だ。サボテンの固い棘をうまくよけながら食べるのだろう。

ガラパゴス諸島のなかでリクイグアナがいない島では、サボテンの棘は柔らかいのだそうだ。敵がいないので、固くなる必要がないのだろう。

トレイルを一回りして、海岸に戻った。全景をビデオにおさめようとカメラを回していたら、また注意された。今度は、足元にアシカである。それも比較的小さい（推定6歳）。波打ち際から20mほど入った砂の上である。目を閉じて、すやすやと眠っている（ように見える）。全く、人を恐れない。

この島のルールで、動物からは1m以上離れることになっている。ましてや触ってはいけ



ない。人間どもはこのアシカの子供をニコニコしながら、眺めている。

クルーズ船は次に、サンタクルス島北部の船でしか行けない浜辺に向かった。ガラスを溶かしたような透明な海。そこで何人かの人々がシュノーケリングを楽しんでいた。赤道直下だが、水はそんなに温かくない。ガラパゴス諸島を包むように流れるペルー海流(寒流)が影響している。水に潜った人によると、熱帯魚もサンゴの姿もなかったという。



浜辺近くの100m四方ほどの池に一羽のフラミンゴがいた。最近のDNA鑑定でこれも、ガラパゴスの固定種とみなされたそう。全身が紅いが、まだその色は薄く、まだ若いと思われる。優雅に首を伸ばしエサをとっていたが、こちらを振り向くと少し助走してふわりと浮かんできた。たったの一羽だったが、見ている人はまるで舞台を見ているように感じた。

鳥の話のついでに、この日の朝、ホテルの食堂でみたダーウィンフィンチについて記しておきたい。

食事をしていると、食堂のなかに体中黒くて雀のような形のフィンチが2羽、3羽と入ってきた。テーブル

の端に乗ったり、食べている人が席をはずすとさっと皿に移って嘴を突き出す。手で払うのだが、すぐにまた寄ってきて、人間を恐れる気配は何もない。

このどこにでもいて地味なフィンチが、若きダーウィンの心を動かし、19世紀のヨーロッパに一大論議をまき起こした「進化論」をうらづける重要な役割を果たした。そう思うと感慨ひとしおである。

ダーウィンフィンチはガラパゴスの固有種である。全長は13~16 cm、翼を広げた大きさは21~23 cm。諸島のほとんどすべての島に生息している。島によって嘴の形などが違い13種に分けられるが、総称してダーウィンフィンチと呼ばれている。

この鳥について、ダーウィンはこう記している。「面白い事実は、ガラパゴスフィンチ属の各種のくちばしが、完全に順を追って大きさを変化させていることだ。深い類縁関係を持つ鳥たちの間で、その体構造が順を追って変化し、多様化を示していく事実を前にすると、次のような空想を本気でめぐらしたくなるだろう。つまり、この群島に元来いたごく少ない固有種群から、ある一種が選りだされ、別々の目的に沿って変形させられたのでは、と」

この記述こそ、「変異」「自然淘汰」「生存競争」の3つの概念を核とする「進化論」の萌芽というべきだろう。ダーウィンが「種の起源」を出版したのは、この時から実に24年後のことになる。

3 日目は、一転して山に向かった。山の中腹にある牧場でガラパゴスゾウガメを見ることが、その一角でスカレシアというヒマワリ科の植物の苗を地元の高校生たちと植林するのが目的だ。

この牧場は国立公園に隣接し、境界には何もさえぎるものがないため、国立公園で生息しているゾウガメが自由に牧場に入出入りできるようになっている。牧場の入り口に立って四方を眺めると、確かにいる、いる。何 10 m かごとに巨大な甲羅をかぶったゾウガメがそれぞれ岩のように鎮座している。あらかじめガイドから指導があったので、ゆっくりと接近する。近づくと、首をこちらに向け、仙人のような眼をして、こちらをじっと見つめる。さらに近づくと、首をすっとひっこめた。このあたりの亀の甲羅は、ドーム型だ。別の島には、首の後ろが少し立っている「鞍型」の甲羅を持つ亀もいる。

ゾウガメのオスは最も大きなもので、体長 1.5m 以上、重さは 270 キロを超えるという。この牧場のゾウガメは体長が 1 m ほどの大きさのことが多い。



さらに足を進めると、泥の池が見えてきた。15m ほどの湿地にずらりとゾウガメが並んでいる姿は壮観だ。このように野生のゾウガメをすぐそばに見ることができるのは世界でもここだけだ。ゾウガメにとってはここはいい湯なのだろう。体についた寄生虫やアリなどを取り払うことができる。一匹のゾウガメがまるで湯から出るように池を出て、ノソリノソリと歩き始めた。しばらく見ていたが、ゆっくりなようでいて結構早い。気がつけば、20m ほどの先まで行っていた。

この牧場の一角で、植林を行った。スカレシアはかつてサンタクルス島で数万 ha の森を作り、ゾウガメやさまざまな動物の「進化の揺りかご」となっていた。ところが、島外から持ち込まれた外来植物が近年急激に増え、それに押されてスカレシアの森が急速に失われている。そのスカレシアの森の再生の一助になればと、10 年来、さまざまな形で植林が続けられている。

この日私たちと一緒に参加したのは、ガラパゴス高校の 2 年生 13 人。それが私たち 1 人 1 人とペアを組み、片言のスペイン語と英語でやりとりしながら、昼飯も一緒にした。

植林活動には学校側も熱心なようだ。植林を始めるにあたって、ガイドが私たちの気持ちを代弁する形で、「日本から来た人々も一緒になって木を植えてくれる。それほど大事なガラパゴスの自然を守るために、若い人も是非、関心を持ってもらいたい」とあいさつした。

2 か所で植林を終えた後、40 万年前に溶岩台地が陥没してできた巨大なクレーターなどを見学して、帰途に就いた。その夜は、ガラパゴス高校の料理コースの生徒たちが作ったフルコース料理を食べた。通常のレストラン並みの値段を支払っていたが、正直、あまり期待していなかった。しかし、食べてみると十分おいしい。メンバーからも驚きの声上がり、最後に全員で料理を作ったメンバーたちと握手をした。

ガラパゴス高校には料理、情報処理、ホテル経営など5つの専門コースがある。料理コースのこどもたちは、いずれガラパゴス諸島内のホテルや高級クルーズ船で腕をふるうことになる。サンタクルス島の人口 16000 人のうち、3分の1以上が子供である。諸島内に高校が6校あるが、大学はない。この子供たちの将来の雇用を考えるのも待ったなしである。

とはいえ、ガラパゴス諸島の最大の問題は、自然と人間の共生である。1978 年にユネスコの世界自然遺産第一号に指定されたが、その後、環境悪化を理由に、「危機遺産」リストに移された。あわてたエクアドル政府の政策もあって、その後、2010 年に危機遺産登録は解除されたが、国際自然保護連合など環境団体などからの批判は今も強い。

何よりも島の人口爆発は激しい。ガラパゴス最大の繁華街、サンタクルス島のプエルト・アヨラの人口は 50 年前、わずか 160 人だったのが、2010 年には 100 倍にも急増。それに合わせるように外来種が島内に次々に入っている。1971 年に 77 種だった外来植物は、現在は 864 種にまで増えてしまった。

島に行く飛行機の中で驚いたのだが、着陸態勢に入る直前に、スチュワーデスたちが飛行機の荷物棚をひとつひとつあけて、スプレーで殺虫剤をまいていた。これもひとつの対策だろうが、貨物船で大量の物資が移動していることを考えれば、気休めにすぎまい。

エクアドル政府も手をこまぬいているわけではない。ガイドによると、ガラパゴス諸島の 97% が国立公園に指定され、人間が居住できるのは残りの 3% にすぎないという。ガラパゴスの大自然の素晴らしさが喧伝されるほど、訪れる観光客が増え、それが自然破壊につながる。自分自身ガラパゴスの自然に魅了された者として、多くの人にその魅力を伝えたいと思うが、その一方で、その自然をできる限り守るべきことの大事さを思う。

その意味で、エクアドル政府がガラパゴス諸島の国立公園レインジャーやネイチャーガイドをできるだけガラパゴス出身者に絞ろうとしているのは望ましい政策だ。世界遺産に登録されたところは、ネイチャーガイドはほとんどが外国人だったという。いまは多くが現地の人間になった。かれらが、自分たちの郷里の大きな価値を知り、それを本気で守ろうとすることがすべての自然保護の第一歩だろう。

<ガラパゴスツアー報告会>

(ピースボートでは面白いことに、珍しい地域にツアーで行くと、ツアー客自身が船内で報告会を開く。これは、ガラパゴスツアー報告会での私の締めくくりの発言。このほかにも、カンボジア地雷除去体験ツアーやアウシュビッツツアーも報告会を開いた)



ガラパゴス諸島は1971年に世界自然遺産の第一号となり、その価値が世界に認められました。しかし、その背景には、ただ単にこの島に珍しい生き物がいるというだけではなく、この島でダーウィンが進化論に至るさまざまなインスピレーションを受けたということがあります。つまり、この島が人類にとって価値ある場所だからこそ、世界中から人々が訪れています。

ダーウィンは22歳でビーグル号という探検船に乗って5年間世界を回りました。4年目にガラパゴス諸島に来て、5週間滞在し、いろいろな動植物を採取しました。

ダーウィンが有名なのは、「種の起源」という進化論に関する本を出したことです。ダーウィンがここに来たのは26歳、そして「種の起源」を発表したのは50歳の時でした。つまり、ガラパゴスに来てから実に24年後です。その間、ずっと研究をしていましたが、発表するのをためらっていました。なぜ、ためらっていたかと言うと、彼が発見したもの、気がついたものは、当時の、世界を見る見方を根底からくつがえすほどにインパクトがあった。そのことをダーウィン自身がよくわかっていたからです。

天文学で言えば、コペルニクスの話に相当します。地球の周りを太陽が回っているのではなくて、太陽の周りを地球が回っている。そういう大転換があった。それと同じで、それまでのキリスト教世界では、世界中になぜこんなに生き物がいっぱいあるのだろうという疑問に対して、その理由は簡単だ、神様がお作りになって、それがそのまま継続しているからだ、というのが当時のキリスト教会の一般的な考え方でした。

これに対し、ダーウィンは、そうではない、動物というものは時間をかけて徐々に変わっていく、生物は変わりうるのだということを言ったわけです。つまり、世界の認識、パラダイムを根底からひっくり返す、そういう提案をした。だから、発表した時に進化論がつぶされないように警戒して、慎重に研究を進めていました。そして、24年後に「種の起源」を書いたわけです。フィンチという鳥はこの群島に13種類いて、くちばしの形が違います。口先だけのくちばし、鼻ずらからのくちばし、額の上からのくちばし、と何種類かの形があります。いろいろな理由があって変化しているのですが、そういうものを彼が見たことが、進化論のインスピレーションにつながったのです。

われわれはそういう島に行って、単に動物を見ただけではなく、ああここが人類の文化のひとつの揺籃の場所なんだということを実感しながら帰ってきました。それを私たちの感想として申し上げます。

以上